

国立国語研究所学術情報リポジトリ

現代語の語彙

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2018-03-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 国立国語研究所, The National Language Research Institute メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001573

現代語の語彙

国立国語研究所

昭和48年10月

I 国語研究所の語彙調査

国立国語研究所（以下「国研」と略称する）では、創設当初から現代語の実態調査の一環として、新聞や雑誌の語彙調査に取り組み、これまでにいくつかの成果を収めてきた。以下にその概要を紹介する。

一 国研の語彙調査の概要

国研における語彙調査は、基本語彙の設定と正書法の確立をめざし、話しことばの研究とあいまって、標準語の確立や現代標準語辞典の作成に資することを目的とする。そのために、これまでに実施した語彙調査は、83ページの表1に示したとおりである。

▽表1の中の「(5) 新聞3紙」の調査は、電子計算機を用いた語彙調査であるが、その内容につ

いては、このシリーズの「I コンピュータ言語学」の中に紹介があるので、ここでは省略する。（発表物）国研報告37・38・42・48『電子計算機による新聞の語彙調査（I）』（IV）
▽表1のほかにも、明治10年の郵便報知新聞についての語彙調査があるが、これは次回の「6 明治時代の言語」で取り上げる予定なので、省略した。

(1) 朝日新聞の語彙調査

〈発表物〉国研資料集2『語彙調査——現代新聞用語の一例——』（昭和27年刊）
昭和24年六月一か月間の朝日新聞全紙面（広告を除く）を対象としたもので、国研における最初の語彙調査である。ある一種の新

聞が、一か月間にどれほど違った種類の語を用いるか、また、それぞれの語がどれほどくつかえして用いられるかを調べたもの。全数調査の方法を採ったが、それは、標本調査の方法に慣れなかったことと、標本調査と比較してみたい考えがあったからである。報告書には、使用度数10以上の語約三千三百の語彙表と、二、三の分析結果を収めている。

(2) 婦人雑誌の語彙調査

〈発表物〉国研報告4『婦人雑誌の用語——現代語の語彙調査——』（昭和28年刊）
昭和25年間一年間における「主婦之友」（全記事）「婦人生活」（実用記事のみ）を資料とした語彙調査で、はじめて標本調査の方法を用いた。報告書には、使用度数7回以上

の語約二千七百の語彙表（五十音順と使用率順）を収めたほか、基本語彙をきめる尺度としての「語の使われる度合に関する分析」、意味による語の分類試案である「意味論上の試み」、漢語の複合形式について考察した「語構造に関する分析」などの記述がある。

(3) 総合雑誌の語彙調査

〈発表物〉

① 国研報告12 『総合雑誌の用語——現代語の語彙調査——前編』（昭和32年刊）

② 国研報告13 『総合雑誌の用語——現代語の語彙調査——後編』（昭和33年刊）

総合雑誌「世界」「中央公論」「文芸春秋」の類と、それに似よりの雑誌を含めて合計十三種（昭和28年7月～29年6月号）の語彙を調査したもの。婦人雑誌の場合と同様、標本調査の方法を用いた。報告書の前編は、使用度数7回以上の語約四千二百の語彙表（五十音順と使用率順）と、その使用法から成り、後編には、この調査の方法と、調査対象にした語彙に関するいくつかの分析（語彙構造の量的分析・意味から見た語彙の構造・語構造に関する分析など）を収めている。

(4) 現代雑誌九十種の語彙調査

〈発表物〉

① 国研報告21 『現代雑誌九十種の用語用字第一冊 総記・語彙表』（昭和37年刊）

② 国研報告25 『現代雑誌九十種の用語用字第三冊 分析』（昭和39年刊）

▽ 国研報告22 『現代雑誌九十種の用語用字第二冊 漢字表』（昭和38年刊）は漢字調査の報告書なので、ここでは触れない。

この調査は、五部門九十種にわたる一般的な雑誌一年分を対象とした標本調査で、採集カードは五十三万枚にのぼり、国研が人力でやった語彙調査としては最大の規模をもつものである。報告書の第一冊「総記・語彙表」編には、標本使用度数7以上の約七千二百語の語彙表（全体の五十音順、使用率順語彙表のほか、各層ごとの使用率順語彙表、助詞・助動詞の五十音順語彙表など）と、その使用法、さらに調査の輪郭、調査の方法などについて記述してある。第三冊「分析」編には、「語の基本度」「語彙の量的な構造」「助詞・助動詞の用法」「複合語」「同じ語が異なる語かの判別」などの考察を収めている。

二 語彙調査で得られたこと

これら一連の調査は、すべて基本語彙設定の一段階として企画されたものであり、使用

率の大きさ、散らばりぐあいからそれぞれの部門での代表的な用語をとらえることを当面の目的としている。たとえば、雑誌九十種の語彙調査では、使用率の大きな方から約七千二百語を語彙表に収めたが、これらの語は延べ語数の約八六パーセントを占めている。（86ページ表1参照）

計量的調査においては、統計理論の整備の必要はもちろんであるが、そのほかに資料とする大量のカードを正確さの点で一定の水準を保ちつつ作成・操作するための、調査単位（単位語）の認定のしかた、カード採集・集計整理などの作業方式の決定・作業の手順、作業の品質管理などに関する周到な計画と実施が大切である。

われわれは、(1)から(4)までの四回にわたる、人手による大規模な語彙調査を経験し、方法論的にも実践的にも多くの成果をあげてきた。

方法論的には、次のような成果がある。

① 層分け標本抽出法による語彙調査の理論と方法を確立した。（報告13・21）

② 標本から調査対象全体の語彙量を推定する方法を求めた。（年報6・報告13）

③ 同音の別語か、同じ語の意味の違いかを操

表 1 国立国語研究所の語彙調査一覧

調査対象		調査方法	母集団	標本			語の単位 助動詞 の調査 ***	助動詞 の調査	漢字の 調査	
資料	期間			延べ 語数	抽出比 (約)	語数				
						延べ				*** 異なり
(1) 朝日新聞1紙	24.6.1~6.30 (1か月分)	全数	24万	—	24万	1.5万	β'	×	×	
(2) 婦人雑誌2誌 (主婦之友(全体))	25.1~12 (1年分)	標本	90万 (推定)	1/6	15万	2.7万	α	×	○	
(婦人生活(一部))		"	33万 (推定)	1/6.5	5万	1.0万				○ (一部)
(3) 総合雑誌13誌 (改造・世界ほか)*	28.7~29.6 (1年分)	"	900万 (推定)	1/40	23万	2.3万	β	×	○	
(4) 現代雑誌90誌 (五部門90誌)**	31.1~12 (1年分)	"	1.6億 (推定)	1/230	53万	4.0万	β	○ (一部)	○	
(5) 新聞3紙 (朝日・毎日・読売)	41.1.1~12.31 (1年分)	"	<長単位> 1.2億	1/60	200万	21.3万	α'	○	○	
			<短単位> 1.8億		300万(未集計)		β'			

注

* 総合雑誌13誌 改造・世界・世潮・中央公論・文芸春秋・心・人生手帖・日本及日本人など13誌。

** 五部門90誌 次の五部門にわかれる。
【評論・芸文12誌】世界・中央公論・新潮・群像・文芸・短歌・美術手帖など。

【庶民14誌】文芸春秋・家の光・週刊朝日・知性・リーダーズダイジェストなど。

【実用・通俗科学15誌】エコノミスト・科学朝日・農業世界・時の法令・自然など。

【生活・婦人14誌】主婦の友・婦人公論・装苑・暮らしの手帖・若い女性など。

【娯楽・趣味14誌】小説新潮・面白倶楽部・映画の友・野球界・囲碁・アサヒカメラ・旅・音楽の友・平凡・明星など。

*** 延べ語数と異なり語数 形態および意味の上からみて種類の異なる単語の数を「異なり語数」といい、それらの一々の単語の繰

返し用いられた度数の総和を「延べ語数」という。たとえば、次のように使う。〈走れ、走れ、小犬。もっと速く、速く。〉という文章は、〈走る・小犬・もっと・速く〉という四つの異なり語数を有し、六つの延べ語数から成る。

** 語の単位 語彙調査においては、語の単位をどのように切り取るかが問題になる。各調査における語の単位については、それぞれの報告書を参照せられたい。大ざっぱな言い方をすると、 α 単位は、比較的長い単位で、大体、文節から助詞・助動詞を切り離れたもの、 β 単位は、それより短くて、ほぼ辞書の見出し語に近い単位である。(α 単位については報告4、 β 単位については報告12、および21に規定してある。) α' は、 α 単位に近い長さ、 β' は、 β 単位に近い長さの単位であることを示す。

表2 各語彙調査の上位40語

順位	婦人誌	総誌	合誌	雑90	誌種	新3	聞紙
1	する	する	する	する	いる	いる	いる
2	なる	いる	いる	いる	ある	ある	ある
3	こと	いう	いう	いう	し	し	し
4	もの	こと	こと	こと	こ	こ	こ
5	ある	なる	なる	なる	な	な	な
6	よい	その	その	その	れ	れ	れ
7	いる	もの	もの	もの	ら	ら	ら
8	いう	ある	ある	ある	二	二	二
9	一	この	この	この	あ	あ	あ
10	その	的(接尾)	的(接尾)	的(接尾)	その	その	その
11	二	よう	よう	よう	も	も	も
12	ない	それ	それ	それ	一	一	一
13	とき	の	の	の	他	他	他
14	この	一	一	一	な	な	な
15	これ	わたくし	わたくし	わたくし	っ	っ	っ
16	おく	日本	日本	日本	歩	歩	歩
17	つける	これ	これ	これ	た	た	た
18	四	ない	ない	ない	東	東	東
19	うえ	くる	くる	くる	可	可	可
20	三	される	される	される	年	年	年
21	いれる	みる	みる	みる	歴	歴	歴
22	それ	おもう	おもう	おもう	給	給	給
23	できる	二	二	二	ほ	ほ	ほ
24	かける	ねん(年)	ねん(年)	ねん(年)	か	か	か
25	あむ	ゆく	ゆく	ゆく	る	る	る
26	つき	しゃ(者)	しゃ(者)	しゃ(者)	六	六	六
27	ばあい	三	三	三	みる	みる	みる
28	ところ	たち	たち	たち	的(接尾)	的(接尾)	的(接尾)
29	おもて	ため	ため	ため	お	お	お
30	うら	十	十	十	ねん(年)	ねん(年)	ねん(年)
31	まえ	できる	できる	できる	ゆ	ゆ	ゆ
32	みる	なに	なに	なに	な	な	な
33	五	よい	よい	よい	八	八	八
34	つくる	人	人	人	め	め	め
35	こども	まで	まで	まで	さ	さ	さ
36	一め	問題	問題	問題	とき	とき	とき
37	また	とき	とき	とき	三	三	三
38	みず	よる	よる	よる	七	七	七
39	くる	お	お	お	四	四	四
40	六	アメリカ	アメリカ	アメリカ	円	円	円

作的に判断する規準を作った。(報告13・25)

④ある語がよく使われる語であるかどうかを論じるには、なまの使用度数を比率(使用率)に換算し、かつ、換算された使用率の精度をも考慮すべきであることを明らかにした。(報告12)

⑤語の基本度数を試作した。(報告25) なお、作業管理に関する問題は、年報5および7に発表してある。

一方、実践的成果としては、次のようなものがあげられる。

①語の使用率およびその資料分野での分布を見るべき、五十音順ならびに使用率順の各種語彙表を作成した。(報告4・12・21)

②同義・類義関係によって用語を選択する手がかりとなるべき、意味による分類語彙表を作成した。(報告4・13・21、資料集6)

③語の使用率・語種別・品詞別・語構成別など、語彙の量的な構造について、いくつかの分析を行なった。(報告4・13・25など)

④漢字の使用率ならびに表記の実態を示す漢字表・語の表記の一覧表などを作成した。(報告10・22)

右のうち、④については別のシリーズが用意されているので、②および③の主な結果について、次章(II)で述べる。

人力による語彙調査で得られた成果は以上の通りである。われわれは、これ以上の規模をもつ語彙調査を実施するためには、電子計

算機を利用するのが最も効果的であると判断して、昭和四十年からその準備を始め、翌四十一年から電子計算機による新聞の語彙調査に着手し、四十八年に一往の成果を出すことができた。しかし、電子計算機で漢字仮名まじり文の日本語を扱うことには幾多の困難があり、語彙調査として完璧な成果をあげるためには、今後の研究にまつところが大きい。

最後に、参考のため、婦人雑誌、総合雑誌、雑誌九十種、新聞三紙の各語彙調査における上位四十語の一覧表を表2に掲げておく。(新聞三紙の場合は、長単位数順表から、記号・助詞・助動詞またはその連続と思われものを除いてある。)

(斎賀秀夫)

Ⅱ 現代語の語彙構成

——語彙調査に伴う研究から——

「語彙」とは、一定の範囲に用いられる語の総体をさす名称である。したがって、国語学

の一研究部門としての語彙論においては、個々の語についての基礎的な研究のほか、語の総体についての研究——たとえば、語彙の総量の推定や、統計的な性格についての研究（計量語彙論）や、語彙の体系的な組成についての研究（語彙構成論）など——も、当然、その研究対象になるはずであるが、この種の研究は、戦前にはほとんど行われなかった。戦後、国立国語研究所の創設を機として、1に述べたような大規模な語彙調査が次々に実施され、それに伴って、ようやくこの分野の研究が新しく開けてきたといっているであろう。ここでは、国研の語彙調査の結果、明らかに

なつたいくつかの問題点についてとり上げてみる。

一 語の使用率分布（雑誌九十種の場合）

どの語彙調査の結果を見ても、語の使用率の高いものは、語数が少なく、使用率が低くなるにつれて語数は多くなる。雑誌九十種の語彙調査の結果についてながめてみよう。

語の使用率と延べ語数をおおう割合をグラフにすると、図1のようになる。これで見ると、使用率一・四パーミル以上の語（異なり語数75、全異なり語数の0.2パーミル弱）ですでに延べ語数の約三〇パーセントを占めている。これが、一三五パーミルあたりでは増加の割合も落ち、〇六六パーミル以下ではほ

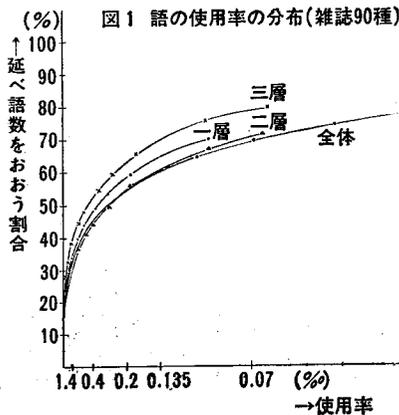


表1 上位何語までで全体の何パーセントを占めるか

順位	%	順位	%	順位	%
上位5語まで	8.4	300語まで	45.3	2500語まで	72.8
10 "	12.3	500 "	51.5	3000 "	75.3
25 "	19.4	750 "	56.7	3500 "	77.3
50 "	25.9	1000 "	60.5	5000 "	81.7
100 "	32.9	1500 "	66.1	7000 "	85.5
200 "	40.5	2000 "	70.0	10000 "	91.7

の雑誌を五つに分類している（一層—評論・芸文、二層—庶民、三層—実用・通俗科学、四層—生活・婦人、五層—娯楽・趣味）が、それぞれの層内での分布も同じような曲線を描く。各層を比べると、第一層は第二、五層と第三、四層との中間的な動きをしている（第四層は第三層と、第五層は第二層とはほぼ同じ曲線）。すなわち、各層語彙の使用率の分布は、(1)庶民と娯楽・趣味、(2)評論・芸文、

ほぼ直線の増加になり、使用率が低くなるにしたがって、百パーセントの線の漸近線となる。はじめ急にふえ、だんだんふえかたがにぶり、漸近線となる分布曲線は、どのような語彙調査にも共通して見られる。雑誌九十種の調査は調査対象

(3)実用・通俗科学と婦人・生活の三類に分かれ、それらを合わせた全体の姿は(1)の類に近い。なぜこのような三類に分かれるかという理由づけは、まだ十分には明らかではない。語彙の量的な構造を知るのに、以上のような分布曲線を書いてみるのはかなり大事なことである。理論的に、どのような規模の、どのような対象ならば、どのような分布曲線を描くかを知る方法は、まだ得られていない。なお、雑誌九十種の調査で、その順位までの見出し語が、延べ語数でどのくらいの割合を占めるかを算出すると、表1のようになる。標本全体で約四万語あるが、そのうちの上位七千二百語の範囲で、九十種の雑誌の本文の八六パーセントほどがまかなわれるわけである。

二 語種の構成（雑誌九十種の場合）

現代語の語彙を構成している単語の出自・原籍を調べて、どういう組成を示すかを明らかにする研究を語種構成論という。日本語の場合は、和語・漢語・外来語・混種語がそれぞれどんな割合で語彙の構成に参加しているかを調べることになる。雑誌九十種の調査結果について見ると、次のようになる。（表2

表2 語種別（雑誌九十種）（%）

	異なり	延べ
和漢外混種	36.7	53.9
語語語語	47.5	41.3
来種	9.8	2.9
	6.0	1.9
計(語数)	30331	411972

略、詳細は報告25を参照）、次のようになる。和語は、度数65以上の高使用率語のなかでは全体の半ばを占めて多いが、低い度数群ではしだいに少なくなり、度数16以下は他と比べてほぼ一定の比率となる。漢語の比率は、度数の大きい群と小さい群とはやや少ないが、他の群では過半数に達している。外来語と混種語は、よく似た分布を示し、度数の大きい語は著しく少なく、度数の小さい語になるに従って増加する。和語が漢語より多いのは度数65以上のところで、度数64以下33の群になると、漢語が和語より多くなる。延べ語数 異なり語数では漢語が和語より多かったのに、延べ語数では和語が漢語より多い。外来語と混種語の割合は、異なり語数の場合よりも減じている。度数94と95を境に

参照)

異なり語数 漢語が最も多く、和語がこれに次ぎ、外来語、混種語は、かなり少ない。

これを語の使用度数で分けて数えてみると(表は省略)

表3 品詞別(雑誌九十種)(%)

	異なり	延べ
名詞類	78.4	61.8
動詞類	11.4	23.6
形容詞類	9.4	12.8
感動詞類	0.7	1.8
計(語数)	30331	411972

三 品詞の構成
(雑誌九十種の場
合)
これも、雑誌九
十種の調査結果を
表3に示す。品詞
の分類は、後述の
『分類語彙表』(89
ページ参照)の大

分類に合わせた。すなわち、名詞類は名詞・
数詞・代名詞を、動詞類は動詞・動詞的な造
語成分を、形容詞類は形容詞・形容動詞・程
度の副詞・連体詞を、感動詞類は接続詞・感
動詞・陳述の副詞・待遇表現に関する造語成
分(「お・御・やがる」など)を、それぞれ
含む。
異なり語数 名詞類が最も多く、動詞類、
形容詞類、感動詞類の順で少なくなってい
る。語の使用度数分布からみると、名詞類は
どの群でも常に多い。動詞類、形容詞類、感
動詞類は使用度数の高い所に多く、小さくな
るにつれて少なくなる。これらの語は、およ
そ語の種類は少ないが、一語一語はよく使わ
れるということがいえそうである。
延べ語数 異なり語数にくらべ、名詞の類
の割合が少なくなり、他の類がふえている。
ことに動詞類は、語の使用度数分布からみる
と、度数の高いところで割合が多くなってい
るのが目立つ。「する」「なる」「いる」など
の基本的な和語動詞が使用率の高い語彙の中
に多く含まれているためであろう。
雑誌の種類と品詞 表4を見ればわかるよ
うに、名詞はいずれの層でも多いが、特に第
三層の実用・通俗科学の雑誌では多くなって

表4 雑誌の種類と語種・品詞 異なり語数(%)

層	語種				品詞名		
	和語	漢語	外来語	混種語	動	形	感
一	39.9	51.8	5.0	3.3	71.6	15.7	11.8
二	35.9	54.3	5.7	4.0	75.3	13.4	10.5
三	28.8	60.3	7.0	3.9	79.0	10.9	9.3
四	44.7	39.1	9.9	6.2	73.8	14.4	10.8
五	41.3	45.7	8.3	4.7	73.1	14.1	11.7

延べ語数 (%)							
層	語種				品詞名		
	和語	漢語	外来語	混種語	動	形	感
一	58.9	40.0	1.5	1.6	56.0	27.1	15.1
二	55.1	41.2	1.9	1.8	59.8	25.3	13.1
三	36.7	59.3	2.1	1.8	69.9	18.2	10.4
四	56.3	35.5	5.7	2.5	65.0	22.3	11.1
五	60.7	34.7	2.7	1.9	57.4	30.0	14.0

おり、その分だけ、その層の動詞類が少なく
なっている。
四 雑誌と新聞とにおける語彙構成の比較
電子計算機による新聞の語彙調査(以下
「新聞」という)は、雑誌九十種の語彙調査
(以下「雑誌」という)と異なり、同形異語
・異形同語の判別がされていないため、両者
を単純に比較することができない。たとえ
ば、新聞では、「工夫」と「工夫」、動詞の
「かき」と植物の「かき」は、異語でありな

表5 語種別(新聞)(%)

	異なり	延べ
和漢	38.8~35.2	43.9~26.6
来種	44.4~46.9	50.7~65.3
混種	12.0~12.7	4.0~6.0
	4.8~5.1	1.4~2.1
計(語数)	38395 ~35680	565460 ~366523

が同形のため、同じ見出し語に属している。また、「語彙」と「語い」「違う」と「違ひ」は同語でありながら異形のため、それぞれ別の見出し形をとる。(ただし、活用語を代表形にまとめるのは、機械で処理されている)。このように同形異語の判別をしていないため、語種・品詞の情報づけでは、一つの語に二つ以上の情報をつけなければならなかった(前例「かき」は、動詞と名詞)。この理由により、表5、表6に示すようにある域値を設けて語彙量を示した。二つ以上の情報をもった語すべてが、実はその情報であった場合(最大値)と、二つ以上の情報をもった語すべてが、実はその情報ではなかった場合(最小値)の二つの値で示したわけである。表内の数値は新聞語彙調査の値を雑誌九十種の種類に整理し直した。異なる点については以下順に述べる。

語種 表5は数字(漢数字・算用数字とも)・記号・固有名詞・助詞・助動詞は除い

ている。

人名・地名は、雑誌・新聞とも全体異なり語数の約四分の一を占めるが、延べ語数では新聞の方がかなり多い(雑誌四・九%、新聞二二・七~一五・三%)。これは雑誌では人名・地名が度数の低い所に多く、新聞では度数の高い所にも多いためである(人名・地名の一、二位は、雑誌では「日本」1.98%、「東京」0.930%、新聞では「東京」1.98%、「日本」1.79%……異形同語判別済み)

数字については、雑誌では算用数字と漢数字をまとめているが、新聞では別にしていく。新聞でもまとめて、雑誌の場合と同じ方法で再計算してみると、(雑誌では73.269%、新聞では211.798%……使用率は記号を除いて計算)、新聞の方がかなり多い。

新聞に人名・地名・数字が多いのは、新聞が事実・記録の報道であることのアラわれであろう。

表2と表5を比べてみる。異なり語数で、漢語、和語、外来語、混種語の順で多いのは同じだが、延べ語数では、雑誌が漢語より和語の方が多いのに対し、新聞では漢語の方が少くなっている。外来語は、雑誌より新聞の方が少し多い。

表6 品詞別(新聞)(%)

	異なり	延べ
名詞類	75.6~79.4	81.2~89.9
動詞類	17.5~13.7	11.0~6.5
形容詞類	6.4~6.6	3.2~2.9
感動詞類	0.5~0.3	4.5~0.8
計(語数)	40774 ~35814	835009 ~547315

品詞 表6における新聞の品詞は次のように集計しなおして作った。動詞類―動詞、動詞性接辞(「〜だす」「〜はじめる」など)。形容詞類―形容動詞語幹及び派生形(「静けさ」など)、形容詞派生形(「美しさ」など)、副詞、連体詞、形容詞性接辞(「〜ばい」「〜がたい」など)、形容詞および接辞の「的」「性」。感動詞類―接続詞、感動詞および接辞「お・こ・おん・み」。名詞類―普通の名詞、代名詞、数字を含む。助詞・助動詞・記号・固有名詞は集計から除く。

雑誌も新聞も、名詞類が最も多く、動詞類・形容詞類、感動詞類の順に多い。雑誌では延べになると名詞類がいくらか少なくなり、その分、他の類が多くなるが、新聞では、ますます名詞が多くなる。これは、数字の延べ語数が多く、これを名詞に含めたためである。新聞では、広告欄や株式欄などで、小さな活字で多くの語が入っているが、これらはほと

表7 「分類語彙表」の分類系列

1. 体の類	2. 用の類	3. 相の類	4. その他
1.1 抽象的關係	2.1 抽象的關係	3.1 抽象的關係	
1.2 人間活動の主体	2.2 精神および行為	3.2 精神および行為	
1.3 人間活動——精神および行為	2.3 精神および行為	3.3 精神および行為	
1.4 生産物および用具物品			
1.5 自然物および自然現象	2.5 自然現象	3.5 自然現象	

んど数字やある特定の名詞（「歴・給・優遇・株」）である。表6の延べ語数でみると、新聞全体では名詞が多い。新聞が情報量の多い要約的な表現をとるのに対し、雑誌全体では、描写的な表現をとる文章が多いために動

詞類や形容詞類が多くなっているの
であろう。新聞と雑誌の性格の違いを示すものか。

五 意味による語彙の分類

〈発表物〉 国研資料集6『分類語彙表』（昭和39年、秀英出版刊）
語彙は、さまざまな形で系列化され、それに従って種々の語彙分類が施されるが、その一つとして、語の意味による分類が考えられる。すな

わち、日本語の語彙を構成する一つ一つの語が、それぞれのような意味で用いられるかを一覽できるように、単語が表しうる意味の世界を分類して、その分類の各項にそれぞれ単語を配当する方法である。

このような語の意味による分類の先例としては、東洋において古く爾雅がありその流れを汲んで日本でも和名類聚鈔や節用集などの分類体の古辞書がある。また、西洋のもでは、ロジェーの「シソーラス」にみられる語彙分類は合理的なものとして高く評価されている。日本でも、戦前に垣内松三氏の『基本語彙学』（昭和13年、文学社刊）や、土居光知氏の『基礎日本語』（昭和18年、六星館刊）などの業績があるが、国立国語研究所の『分類語彙表』は、現在のところ、語の意味に基づく語彙の体系的な系列化と、それに基づく分類として、一つの水準を示したものと見えるだろう。

この分類語彙表には、約三万二千六百語が収められている。これらの語は、雑誌九十種の語彙調査における高使用率の語のうち、人名、会社名、球団名等の個別の名、および記号の類を除く約七千語を中心とし、それに続く使用率をもつ約五千語を補い、さらに阪本

一郎氏の『教育基本語彙』（昭和33年、牧書店刊）に選ばれた二万二千五百語のうち、右と重複しないものを加えたもので、その意味で、現代日本語における基本的な語と考えることができる。

これらの語を、表7に示す四類十一項に系列化し、さらに下位分類を施したもので、全分類項目は七九八項目に細分されている。

語彙を、意味系列に従って分類していくとそれぞれの分類項目には意味の近い語、すなわち、類義語・同義語・対義語などが集められることになる。その一例として、いま『分類語彙表』の「1.354 天気」と「3.330 風俗」の項目でその様相を示すと、表8のようになる。

このような分類語彙表の果たす役割としては、次のようなものが考えられる。

- ① 表現辞典、詞藻辞典としての役割
- ② 方言の分布・命名の変遷を知る手がかりとしての役割
- ③ ある個人またはある社会の言語体系もしくは言語作品について、表現上の特色を見る物指しとしての役割
- ④ 基本語彙選定のための基礎データとしての役割

表8 「分類語彙表」の一例

1. 体の類	
1.5 自然物および自然現象	
1.51 自然・物体・物質	
1.515 気象	
1.515.1 天気	天候 天気 晴雨 空模様 日和 秋日和 好天 悪天 悪天候 風雲 風波 波風 雨風 (あめかぜ) 風雨 風雪 雨露 晴れ 晴天 日本晴れ 快晴 五月晴れ 秋晴れ 晴れ間 雲間 雨上がり 炎天 日照り 照り 早暈 湯水 曇り 曇天 朝曇り 薄曇り 花曇り 高 曇り 雨降り 雨天 雨模様 雨気 雪降り 雪もよい 雪模様 雪空 荒れ 荒れ模様 荒天 暴風雨 風雨 風 雪 しけ 荒らし (嵐) 砲煙彈雨 風浪 浪風 (なみかぜ) 嵐 朝なぎ 夕なぎ 朝焼け 夕焼け 虹
3. 相の類	
3.3 精神および行為	
3.330 風俗	歴史的 古風 昔風 クラシック 今様 モダン バロック ゴシック アブル (ゲール) グロテスク デカダン 洋風 唐風 和風 和様 名(めい) 名高い 高名 有名 無名 著 名 知名 ポピュラー 名題 やんごとない しがない べいべい れっ きとした 微賤 卑賤 下賤 男尊女 卑 女尊男卑 貴い いやしい 上品 下品 下卑た 下司 高尚 高貴 雅 高雅 俗 俗悪 通俗 低 俗 卑俗 野卑 浅薄 愚劣 くだら ない やくざ 安っぽい けちくさい つまらない 卑猥 淫猥 狼狽 猥褻 尾籠 淫靡 壮大 雄渾 雄大 壯麗 豪勢 豪華 デ ラックス 輝かしい 花々しい 幽玄 枯淡 優雅 古雅 典雅 エレガント 優美 華美 華麗 華奢 花やか でやか あでやか みやびやか みや びた 典麗 秀麗 端麗 端正 流麗 瀟洒 楚々 清 楚 艶麗 小ざっぱり みずぼらしい はで じみ 風流 不風流 粋(いき) 小粋 だて やば 無骨 生硬 ハイ カラ バンカラ スマート シック 垢ぬけ おつ ドレシー (以下略)

この中で、われわれが最も重要視するのは④の役割である。一国語の基本語彙は、生活上のまたは意味上の各分野から、最も適切な語を選ぶことによって定められなければならない。そのためには、表現されるべき世界、意味の全分野が、偏りなく余すところなく見渡されなければならない。そこに分類一覽表があれば、その各項に収める語句の重みが、その必要性や、はたらきや、語感など、また実際の使用率や使用範囲などの観点から、互いに比較商量されることになり、したがって適切な語の選択が可能になるわけである。す

なわち、基本語彙選定のためには、Iに述べたような語彙調査による統計的な方法も必要であるが、同時に、このような語の意味による体系的分類の方法を併用することが不可欠の条件になるであろう。

六 語構成に関する分析
婦人雜誌、総合雜誌、雜誌九十種の各調査報告書には、語構成に関する分析が、それぞれ収められている。これは、各調査の単位となった見出し語が、他のどういう単位とどういう順序で結合(いわゆる複合・派生など)

して用いられるかを分析したものである。これらの分析結果は、語彙調査における調査単位の規準を検討するさいの基礎資料となるだけでなく、現代日本語の語構成の実態を量的に把握する上の手がかりとなるものである。たとえば、①実際に使われたすべての語のうち、約三分の一あまりの語は、他とたがいに結合しあって用いられること、②他の語と結合するものの大半は名詞であること、③和語と漢語とでは漢語の結合力のほうが、はるかに優勢であることなどが、これらの結果から知られる。(中野洋・斎賀秀夫)

III 現代語の意味・用法の研究

国立国語研究所では、I・IIに述べた語彙調査に関する研究とは別の路線で、現代語の語彙に関する研究をいくつか行ってきた。語彙研究の中心的なテーマは意味にあるといってもよいだろうが、語の意味・用法の研究を直接の対象としたものの中から、その二、三を紹介することにしよう。

一 類義語の研究

〈発表物〉国研報告28『類義語の研究』（昭和40年刊）

国語にはほとんど同じ意味を表すのに和語・漢語・外来語と幾通りもの言い方のある語が多く、また、ほとんど同じ意味の語を社会のある分野では厳密に使い分けられている場合も

ある。さらに近ごろはマスコミの面で新語・外来語がはらんし、これに伴い類義語も増加して種々の混乱を招く傾向もみられる。この調査は、週刊誌に現れる類義語なども参考資料として、類義語にはどのような種類が考えられるか、どのような理由で類義語が共存しているかを、意味・用法・使用者の面から具体的に考察したものである。現代日本語を対象とした類義語の研究としては最初の試みであったが、わりあい短期間の中で、しかも類義語に伴う問題をさぐるという性格の計画であったので、類義語プログラムの研究としては基礎的なものではなかった。

報告書の内容は、まず、現代日本語における類義語の種々相について一往の概観をした

上で、アンケート・質問紙調査を重ねたものの記述が、おもな部分になっている。(当時は、語彙調査の結果としてできた、語の文脈つきカードもまだ自由に他に活用できる段階ではなく、他にもまだ現代語の用例カードがなかったことも、調査がこういう方向に向かう原因であった。)

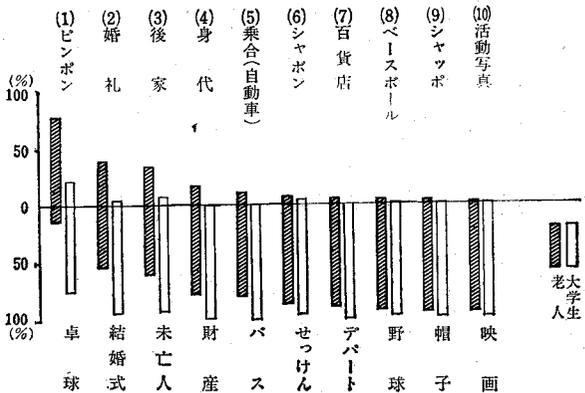
類義語のうちで、実質的な意味にはほとんど差のなさそうな同義語的なものと、実質的な意味に明らかに違いが、ずれのあるものとに一往分担当をわけた。前者においては、ふつう意味と呼ばれるものからみると周辺のないいわゆる「語感」と呼ばれるようなものにおのずと目を向けざるを得なくなった。語感的な差異を検討するための類義語のセットを

選び出し、その一部分について国研職員にアンケートして問題点を拾い出し、それをもとに「直す／修理する」「女性／婦人」などについて数問ずつを設けた質問紙調査を大学生・社会人に実施した。

結果の一例をあげてみると、「女性向けの雑誌」は「婦人向けの雑誌」より、より若い年齢層を対象にしている感じだという点で九パーセントの人々が一致し、予想を上回る一方的な結果であった。他の問もほとんどすべて八割程度以上の一致した傾向が出て、類義語間の語感的な差異も必ずしも個人的・主観的なものではなく、かなり人々の間で一致するものもあるらしいことがわかった。

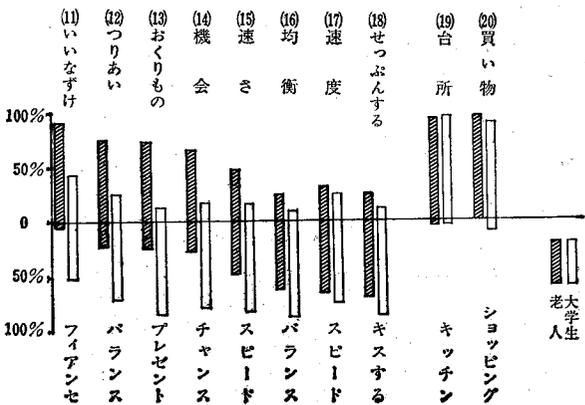
次に、類義語を並記して「どちらがお好きですか」という質問を大学生・社会人に行ったが、「礼儀作法」より「エチケット」が、「玩具売り場」より「おもちゃ売り場」が好まれた、などの結果が得られた。さらに、単に語を提示して好みを聞くのではなく、ある実生活上の立場に立ったと想定し、そこで類義語のいづれをとるかという問を大学生に行った。たとえば、デパート内での表示を出す立場において、やはり「玩具売り場」でなく「おもちゃ売り場」を選ぶ人は九割を占めた。

図1 どちらの語を使用するか



この調査では、その選択の要因をも追及したが、「おもちゃ売り場」を選んだ要因としては、「こどもの物らしい、かわいらしさが出る」「親しみのある、いいことばだ」が多かった。

もう一つ、三十組の類義語について、そのどちらを自分が普通に話す時に使っていると



意識しているかを、老人グループと大学生グループで調べた。「卓球・結婚式・未亡人」などの現代的な語に押され気味な「ビンポン・婚礼・後家」などの旧式になった同義語は、大学生より老人たちにより多く残っていた。しかし、上の同類と予想した「シャツポ・活動写真」などは老人にもほとんどなく、

大学生と同じくほとんど全員が「帽子・映画」になっていた。また「つりあい・おくりもの・機会」と比べて「バランス・プレゼント・チャンス」など現代的な外来語は老人より大学生が多く使っている（と意識されている）ことが示された。（図1を参照）

以上は同義的な類義語についての調査であったが、意味に明らかなずれのある類義語についても、やはりアンケート・質問紙調査が実施された。たとえば、地震の震度のうち、「弱震」より「軽震」のほうがはげしいと答えた人は半ばをこえ、「弱震」のほうがはげしいという、定義に合致した答えは四分の一にも及ばぬという意外な結果であった。

以上のような調査のほかに、「夫／主人」「裏日本／日本海側」などマスコミその他で問題になる類義関係、外来語のさかんな流入によって生じる類義現象、「移動／異動」「平行／並行」のような同音類義語についての問題の指摘や調査なども含まれている。

なお、類義語の語感的な側面については、現在その追跡的な調査を行っている。語の中核的な意味は短い年月の間にはまず変化しないであろうが、語感などの側面には十年ぐらいのうちにも変化があるかと予想される。

そこで、昭和37年に実施した調査のうちの一部と同一の設問に新たな設問を加え、青年層・中年層・老人層を調査対象とし、東京と大阪で調査を実施し、その結果について分析中である。

二 動詞・形容詞の意味 用法の研究

〈発表物〉

①報告43 『動詞の意味・用法の記述的研究』（昭47年刊）

②報告44 『形容詞の意味・用法の記述的研究』（昭47年刊）

③資料集7 『動詞・形容詞問題語用例集』（昭46年刊）

この研究は、「現代語の動詞・形容詞の意味・用法を、言語作品のなかで実際に使われた用例によって記述すること」を目的としたものである。現代語の単語の意味の記述は、国語辞典の語釈以外にはほとんどされてきていないが、辞典は実用性を要求される上からも、意味記述としてみれば本質的な制約を負わされている。記述の対象として、まず動詞・形容詞（形容動詞を含む）を選んだのは、名詞に比べて専門語的な要素が少なく、言語学的処理の対象として適当だろうと予想される

たからであった。この計画の第一の特色は、動詞・形容詞を合わせて約五十万枚という、かなり大量の用例を準備し、客観的な事実にもとづいて考察した点であろう。用例採集の範囲は、明治・大正・昭和の三代、約六十年にわたって一般に広く読まれている『武蔵野』（国木田独步、明31）から『人間の壁』（石川達三、昭34）に至る五十二の代表的な文学作品を中心として、『高崎山』（梅棹忠夫、昭36）など科学説明文・論説文二十四を加え、さらに『現代雑誌九十種』『総合雑誌』の語彙調査の用例をも使った。

動詞 まず、動詞の研究からみよう。内容は、主要部は二つにわかれている。第一部「意味特徴の記述」は、類義的な動詞どうしをつぎあわせて、その意味を区別する特徴を用例によって裏づけながら記述するという方法による三百七十一項目から成り立っている。たとえば、「ほえる」は動作の主体の面で猛獣や犬にかぎられるのに対して、「なく」は動物一般に広く使われる点に区別がみられる。このばあい、「なく」が上位語、「ほえる」が下位語の関係にあり（「ほえる／＼なく」と不等号で表示）、こういう上位下位の関係

(Hyponymy)の抽出による、動詞の意味特徴の記述がもっとも多くみられるが、ほかに「ほえる／＼いなく」のような同じレベルにおける対立、「おす——ひく」のようないわゆる反対語の関係にある対立の記述もある。

このような意味特徴は、「主体」のほかに「対象」「動作・作用の属性」「環境」「結果」「意図」「原因」「評価」「その他」の九類に分かれている。これらの諸側面の特徴はもちろん密接な相互関係をもっている。たとえば「そよぐ」は次の三つの観点から記述されている。まず「主体」に関して、「ゆれる・ゆらぐ・ゆらめく」とちがって、わずかな風でも動くような軽いもの(ほとんど植物)に限定されている。「動作・作用の属性」の点ではいわゆるそよ風でも動く程度の、勢いの弱さが特徴である。「原因」の点では「そよぐ」はわずかに風が吹いてそのためにゆれるという積極的な特徴がある。これらを総合すれば、およそ「そよぐ」の語義が規定できそうにみえるが、本書ではいわゆる成分分析(Componential analysis)におけるように、単語の意味を諸成分に分析しつくし、諸特徴の束として規定するという目標を必ずしも立ててはいない。上位・下位の対立を主とし

て、広い範囲の動詞からできるだけ多くの特徴をぬきだすこと自体を直接の目標としている。したがって分析の対象は、成分分析のようにまとまりのよい意味分野に限られる必要がないわけである。

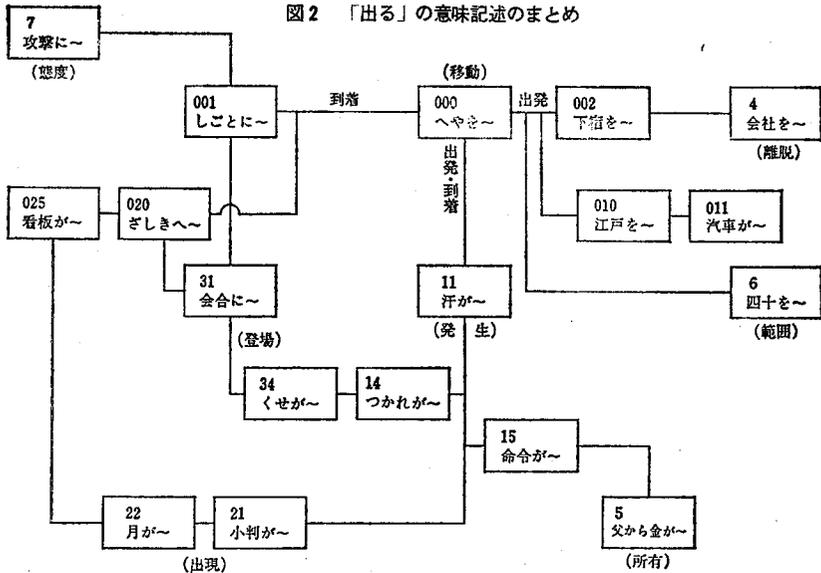
第二部「個別的記述」は、基本的ないくつかの動詞をとりあげ、その一つ一つについて、用例にもつき意味・用法をくわしく記述したものである。第一部は、ある動詞が他の動詞との関係において作り出す体系の追求であったのに対して、第二部は一つの動詞の意味のなかにおけるいくつかの意味の相互関係など内的な体系を明らかにしようとするわけである。基本的な動詞はいうまでもなくみな多義語であって、普通の国語辞典をみると、多いものは何十という意味が列挙されている。そして、①②③……という風に同列に並べられているか、①②④①③①②③……といった風に階層的に位置づけられているかであるが、いずれにしても一つ一つの意味ははっきり区切られたような記述を辞典ではせざるをえない。しかし、実際には中間的・過渡的な用法・用例もあり、諸意味間の有機的な関係も十分辞典の中に示せるものではない。また、辞典では結論だけを簡潔に記すた

めのスペースがやつとで、結論に達する根拠や論証の過程はほとんど切りすてられざるをえない。また、辞典編集者は母国語についての内省にもとづいて意味の記述をしていく場合もあるが、対象が母国語ではあっても、主観的な内省だけにたよった場合、ある用法を思い出さなかったり、一面的なとらえかたをすることもあるだろう。それをさけるため

にも、大量の用例により、客観的な事実に基づいて意味の記述をすすめる必要がある。特に、述語的な部分の中心になることが多く、センテンスのかなめともいえる動詞の基本的なものについての、意味の一步一步のこまかい変化・発展の詳細な体系的な記述は、現代日本語の記述のなかでの欠かせない一部分である。こういう要請に具体的にこたえようとしているのが、この「第二部」であるともいえる。具体的には報告書を読みただく外はないが、「でる」の意味記述のあとにある「まとめ」の図だけを一例として図2に示す。

第一部・第二部を通じて、動詞の格支配・アスペクトその他の文法的性質が意味記述に役立てられているが、第三部「意味とほかの性質との関係」には文法的性質・文法的性質と動詞の意味との関係が一般的に論じられて

図2 「出る」の意味記述のまとめ



いる。

形容詞 形容詞についても動詞と同じような方法で仕事を始めた。用例を採集した資料の範囲も既述のように動詞と全く同じであったが、結果として得られた用例の数量は、異なりでも延べでも動詞よりずっと少なかった。形容詞どうしをつき合わせて、その意味を区別する特徴を具体的にぬぎだす作業がうまく進まず、百項目ぐらいに止まったために、結果としては、後述するような動詞とはやや違った形に、報告の中心をまとめざるをえなくなった。意味特徴をとりだす作業が難航した、いちばん客観的な要因としては、異なり語数の違いがあったのではないかと、あとで気がついた。語と語をつき合わせて、相互の意味を区別する特徴をとりだすことができ、かつそのことの有効性が大きいものは、動詞どう

し、形容詞どうしのあらゆる組合せからみれば、一部分にすぎない。したがって、異なり語数のずっと少ない形容詞どうしのあらゆる組合せの中で、こういう方法を有効に適用できる組合せの絶対数は、動詞の場合よりはるかに少ないと考えられるからである。

個々の単語に密着したかたちで意味特徴をとりだすことが難航した過程で、形容詞の意味がもっているいろいろな側面に気付いたことで、そのいくつかをやや一般的に考察することにした。構文的な性質などを手がかりにして、意味上のグループを見つけることも努めた。まず、日本語の形容詞の中で「うれしい」「ほしい」「いたい」など感情・感覚を表す一部の語はきわめて主観的な性質が濃く、特色のあるグループを形成しているが、一般の属性形容詞と対比させつつその諸特性を用例によって検討し、その下位分類を試みた。つぎに、属性の「主体」は形容詞の意味に接近するための主要な手がかりだと考え、形容詞の表す性状の主体になりうるものの種類・範囲についてしらべてみた。たとえば、人の属性を表す形容詞のうちで、「おとなしい」「健康な」のように人間一般に広く使われるものが多い。しかし、「がんぜない」「やんち

やな」など年少者に、「しとやかな」「なまめかしい」など女性に、「いなせな」「めめしい」など男性にしか普通は使われないというような、主体に制限を伴ったものもある。このような制限は、その表す属性の内容と密接な関係をもっていることはいうまでもない。つぎに、形容詞の意味の特質の一つとして「程度性」を考え、形容詞に多くみられる反対語の中のかんりの部分や、その他の対立を、程度性に関係のあるものとして位置づけてみた。もう一つの特質として、形容詞は人間のものとごとの感受のしかたを表すという性質が濃いので、評価・感情などの主観的な要素について、いくつかの種類を考えてみた。

用例集 右とまったく同一の資料を使って、『動詞・形容詞問題語用例集』を作成・刊行した。動詞・形容詞の約五十万の用例をすべて資料として一般に活用できるように刊行できれば申し分ないが、それは膨大で実際的な計画になりえなかつたので、なまの資料そのままではなく、ある観点から資料を処理した結果をいくつかまとめたものである。すなわち「辞典にあまり登録されていない動詞・形容詞の用例」二、いくとおりにも読みうる

動詞・形容詞の用例」「自動詞か他動詞か決めにくい語の用例」「語末からの逆びきによる動詞・形容詞一覧」(最後の二つだけは、右の用例ではなく、辞典の見出し語を資料としたものである)の四種類の資料を集めて、用例中心の参考資料を提供しようとしたものである。

三、その他の語彙研究

(1) 助詞・助動詞の意味・用法の研究

〔発表物〕国研報告3『現代語の助詞・助動詞——用法と実例——』(昭和26年刊)
標準語の体系を確立するための基礎作業として行ったもので、語の意味・用法を記述したものとしては、国研の報告書の中で最初のものである。共通語として最も一般的な新聞・雑誌(昭和24年4月から25年3月までのもの三十四種類)の文章の中から、助詞・助動詞の実例約四万八千を拾い上げ、一々の用例について意味・用法を考察し、分類・記述したものである。もちろん、語彙的な意味というより、文法的な意味を対象としたものであるが、従来見られなかつた大量調査の結果に基いて分析していること、その意味・用法の分類や記述にも多くの新見が見えることなどから、各方面で広く利用されている。

(2) 同音語の研究

〔発表物〕国研報告20『同音語の研究』(昭和36年刊)

国語には同音語が多いと言われ、特に漢語にこれが著しいため誤解を生む原因となり、マスコミにおける意志の伝達を妨げているとされる。したがって、同音語が実際にどのような混乱を起こしているかを調査し、さらにその混乱がどういふ条件のもとに起こるかを分析する必要がある。この調査は、基礎資料を『同音語集』(衆議院速記者養成所刊)にとり、各種辞典・用語集等で補充し、また具体的資料を新聞社のテレタイプ原稿によって補い、混乱の所在および原因を考察した。同じく同音語といってもまぎれやすいものと、そうでないものがありうるという観点から、同音語を、①それが使われる位相の異同 ②その語が複合語をつくる場合の結合のしかたの異同 ③品詞性の異同 ④その語が一定の慣用的な言い方にか使われないか否か ⑤アクセントの異同等の条件を設けて分類してみた。さらに、高校生・大学生を対象とする小規模のテストを実施して、どのような条件を与えれば同音語が正しく理解されるかという点を調査した。(西尾寅弥・斎賀秀夫)